

アジア太平洋戦争下の中国伝道 ——『怨みを毀つ涙の握手』とその時代——

山口陽一

アジア太平洋戦争の最中にも日本の教会は伝道を続けた。戦時下の伝道とは如何なるものであったか。日本軍の侵攻に伴って行なわれた中国伝道の一端を考察する。

この時期の純福音派を代表する伝道者に土山鐵次がいる。日本自由メソヂスト教会の聖書学者にして伝道者、日本聖化教団成立に際して総理となった人物である。南京大虐殺後の中国に伝道旅行を行なった記録『怨みを毀つ涙の握手』は時代に歓迎された。本稿ではこの書物に注目しながら、きよめの信仰に生きた戦時下の伝道について考えてみたい。

I. 中国伝道の歴史

中国におけるキリスト教伝道の歴史は、唐代（618～907年）の景教（ネストリウス派）に遡る。さらに元代（1271～1368年）にはフランシスコ会モンテ・コルヴィーノ、明代（1368～1644年）後期にはイエズス会のマテオ・リッチ他による宣教がなされ、典礼問題で禁教迫害の始まった1723年にはおよそ300の教会堂と約30万人の信徒がいたと言われる¹。

プロテスタント伝道は1807年、ロバート・モリソンの広州到着に始まる。1842年のアヘン戦争、1856年のアロー号戦争以来、制約が取り払われ、伝道は飛躍的に発展した。1851年、キリスト教を独自の解釈で受け容れた洪秀全の太平天国の騒乱が勃発する。1842年以前にプロテスタントの宣教師は10数人であったが、1889年には約1300人に増加、信徒も1893年には約55,000人に増えた。カトリックは1896年には、宣教師約750人、信徒約53万人を数えるようになっていた。これに伴って反欧米・反キリスト教運動も頻発し、その最大のものとして1900年には義和団事件が起こった。義和団事件で殺害されたのは、カトリックが宣教師約50人、信徒約30,000人、プロテスタントが宣教師約200人、信徒約1900人とされる²。

義和団事件はキリスト教宣教に大きな影響を与える。それまでの伝道のあり方が見直され、事件の賠償金によってイギリスが山西大学を建設するなど教育伝道が重視されるようになった。幾多の殉教は伝道の熱心を呼び起こし、さらに多くの宣教師が派遣されることになる。1920年代の終わりには、プロテスタント宣教師は約6,000人に、1935年の信徒数は512,539人となった³。

II. 日本人による中国伝道

日本人による中国伝道は、満州事変から日中戦争へと戦争の拡大に伴い、にわかに盛んになる。比屋根安定は同時代の史家としてその歴史的背景を次のように語っている。

「最近不幸にして勃発した所謂事変は、幸いにして東亜新秩序の建設といふ曠古の大業に日本をして発起せしむるに至らしめ、最も深い意味に於て親善すべき日本と支那とが、今や共通の大理想の下に提携すべき好機に際するに至った。随て日本の基督教徒が支那へ続々と渡って、支那人のために福音

139頁。矢沢利彦『中国とキリスト教』1927年、近藤出版社

² 吉田前掲論文、158頁

³ 同右、163頁

¹ 吉田寅「中国」『アジア・キリスト教の歴史』1991年、日本基督教団出版局、

を宣伝し、更に福音を實行して、此誓願を以て一生貫き、其屍を馬革に包み其骨を彼土に埋める事は、日本基督教徒に課されたる天来の使命である」⁴。

満州事変以前の中国伝道の先駆は、日本基督教会伝道局の要請に応じて、1903年に天津、さらに保定に遣わされ3年半の伝道にあたった丸山傳太郎である。天津には、やがて満州伝道会を起こす陸軍主計少将日疋信亮がいた。清水安三は1917年に奉天に赴き、1919年には北京において飢餓救済及び被災児童の収容施設を始め、朝陽門外に崇禎学園を創立して教育伝道にあたった⁵。1917年以来上海で内山書店を経営した内山完造は、中国人を愛し魯迅を友とした忘れがたいキリスト者である⁶。

日疋により1933年に設立された満州伝道会は、日本人による中国伝道の中心的な活動であり、日中戦争の勃発と共に東亜伝道会となる。本部を富士見町教会に置き、山本忠興が副会長、松山常次郎が理事長を務めた⁷。1940年に77箇所の伝道地、75名の伝道者を擁していた。会の方針に従い、伝道者の3分の2は満州人、中国人であった。満州に関しては、賀川豊彦の提案で1940年から入植事業を開始した「満州基督教開拓村」の実態が、近年明らかにされ始めている⁸。

1937年、支那基督教連盟の招請を受けた日本基督教連盟は、連盟長千葉勇五郎、総務部長小崎弘道、委員河井道子、総幹事海老沢亮を日支修交使節として派遣した。日中戦争が勃発すると、日本基督教連盟は基督教聯合時局奉仕委員会を組織し、各教派が一致協力して、「皇軍慰問袋献納、前線慰問使

の派遣、国際輿論の是正等」にあたった。中国における防共と人々の敵愾心を和らげる宣撫工作にキリスト教として協力する宣撫伝道である。現地宗教工作のため、北支軍報道部に安村三郎、南京地方に木村清松、古屋孫次郎、中澤豊兵衛、前田彦一、斎田晃、志村卯三郎、蘇州地方には河合堯三、平田甫、清水久男、丹陽地方に寺尾章二、杭州地方には畑中岩雄、堺直武、小山寅之助、北支方面に伊藤榮一、村上治、川端忠治郎、蒙疆方面に小川秀一が派遣され日本人による中国伝道の開拓に従事した。前線慰問のための天津憩の家には1938年12月までに約10万人の将兵が訪れ、北京の医療セツルメント愛隣館は中国人のための医療活動を行なった⁹。日本基督教青年会同盟は1941年6月時点で、北京に奈良伝、南京には安村三郎と井口保男、広東に久芳昇、上海駐在員に末包敏夫を派遣していた¹⁰。1939年12月には27の日本人教会と4つの社会事業団体が連盟を結成する。その理事長は北京日本基督教会の村上治、理事に北京日本人教会の清水安三、北京聖教会の成澤牧師、北京自由メソヂスト教会の織田金雄、天津メソヂスト教会の井上牧師が立てられている。比屋根は、特筆すべきこととして1939年2月に神道、仏教、キリスト教による中支宗教大同連盟が結成され、東亜新秩序の建設に宗教者として協力したことを上げている。同連盟は本部を上海に置き、総裁は近衛文麿、副総裁大谷光瑞、そして小林誠が基督教部長、斎田晃が同主事を務め、キリスト教側が総長を務めたこともある¹¹。

中国伝道について記された書物も数多く出版されるようになる。1939年には、田川大吉郎「支那の新勢」・前島潔「支那の基督教」・高島平三郎「支那の民族性」の三論文が教文館の「時の論叢書」(第二輯)として、同年には、ラトゥレットのThe Chinese, their History and Culture (1934年)の翻訳『支那の歴史と文化』(生活社)が出ている。すでに引用した比屋根安定の『支那基督教史』も同年の発行である。満州生まれの竹森満佐一の『満州基督教史話』(1940年、新生堂)、清水安三の『朝陽門外』(1940年、朝日新聞社)、

⁹ 海老沢亮『国民精神総動員宗教運動資料(第一輯)興亜の使命と基督教』1939年、日本基督教連盟、45頁

¹⁰ 日本基督教青年会同盟『大陸事業の一ヶ年—昭和十五年度報告—』

¹¹ 比屋根前掲書、320頁

⁴ 比屋根安定『支那基督教史』1940年、生活社、310頁

⁵ 清水安三は戦後、桜美林学園を創設する教育者。自伝に『石ころの生涯—崇貞・桜美林物語』1977年、キリスト新聞社がある。崇貞学園をめぐる人物群像は、山崎朋子『朝陽門外の虹』2003年、岩波書店に詳しく描かれている。

⁶ 内山完造『そんへえ・おおへえ—上海生活三十五年』1949年、岩波書店の他多数の著書があり、評伝として、吉田曠二『魯迅の友内山完造の肖像—上海内山書店の老板』1994年、新教出版社がある。

⁷ 満州伝道会に関しては、熱河会『荒野をゆく—熱河・蒙古宣教史』1967年、未来社以来、様々な証言があり、まとまった研究としては韓哲曦『日本の満州支配と満州伝道会』1999年、日本基督教団出版局がある。

⁸ 賀川豊彦記念松沢資料館『改訂版満州基督教開拓村と賀川豊彦』2007年

カトリックでは鷺山第三郎の『支那天主公会の実情』（1941年、福村書店）がある。熱河宣教に献身する沢崎堅造の『東亜政策と支那宗教問題』（1942年、長崎書店）はクリスチャン経済学者の力作である。同じく経済学者ヒューズの *The Invasion of China by the Western World* (1937年) は当時の中国学者魚返善雄により『西洋文化の支那侵略史』（1944年、大阪屋号書店）として出版された。中国への関心が高まり、キリスト教の国策協力が叫ばれる中、土山鐵次の『怨みを毀つ涙の握手』は1939年3月の初版以来1940年9月までに5版を重ねている。

Ⅲ. 純福音派のリバイバルと土山鐵次

土山鐵次は1885（明治18）年10月、熊本県玉名郡滑石村小浜に生まれた。日露戦争の勝利に国中が騒然となっている頃、熊本中学を卒業し、1906（明治39）年上京。北米において成功した親戚の帰朝談に発奮し一獲千金を夢見て渡米、ロサンジェルス郊外の義兄三原茂数の農場に寄寓した。本人によれば、物質万能と拝金主義のアメリカに失望し、人生の目的や死後の問題に懊悩する日々を過ごす。キリスト教には偏見による憎悪があり、仏教に望みを託すが、学べば学ぶほど心は暗くなり失望は増すばかりだった。悲壮な覚悟で読み始めた聖書の「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言による」ということばに光明を見出し、「人の子の来れるも事へらるゝ為にあらず、却って事ふる事をなし、又多くの人の贖いとして己が生命を与へん為なり」ということばにキリストの生涯の目的を知った。「口には精神教育、祖国のため、など大言壮語してはるるが、心の底では名誉心や利己心に満ち満ちてゐる自分の姿が示され、人生の目的は自己のために生くるのではなく、神と人のために生くるにある」と確信した。しかし、決してキリスト信者になってはならないとの母の誠めを思つて一ヶ月ほど悩んだ末、「何が真の親孝行か？ それは真の道に従うことだ」と決心し、次の日曜の夕拝で会衆の真ん中に立ち、信仰を告白した。後年、土山はその回心の顛末を回顧して言っている。「あゝその瞬間、私の心の苦悶と懷疑とは一切取り去られ救いの確信と歓喜が満ち溢れました。明治四十一年四月十二日午後八

時半、罪人なる私は罪赦され神の子とせられました。爾来三十四年の今日に至るまで主は常に私を助け導いてくださいました」¹²。

その後、苦学してハイスクールを終え、会衆派のポモナ大学に入学したものの、その世俗的な雰囲気には飽き足らず、新設間もないパサディナのナザレン大学に転じた。ここで土山はリバイバルに遭遇し生涯の献身を誓う。この時以来、*What Jesus would do?* が彼の信仰的判断の基準となった。先輩に渡辺善太、同期に喜田川広がいた。その後、土山は平出慶一を頼ってメソジストのドルー神学校に移り、さらに4年の神学課程を学ぶ。特にギリシャ語に秀で卒業時には奨学資金を受賞した。これによりヨーロッパ留学の道が開かれたが、彼は一刻も早く同胞に福音を伝える道を選び、さらに一番条件の悪い小教派の自由メソジストに属することを選択、1915年に按手を受けて帰国した。滞米13年の後、大阪の河辺貞吉に迎えられ、その場で紹介された滝口鶴子と結婚する。日本橋教会と日本自由メソジストの神学校である大阪伝道学館、ここが土山の働く場となる。幾つかの机が並べられただけの日本家屋、「祈ることと道を伝えること」だけを目的に設立されたこの家塾は、児童伝道者西阪保治、聖書学者馬場嘉市などを輩出していた。土山校長の下に新たな塾生たちが集まり始め、土山はたまたま来日した北米自由メソジストの伝道局長を説き伏せ、旧校地を売り払い阿倍野区丸山通りの松林1,300坪を購入。新築4棟、旧屋3棟の日本自由メソジスト神学校が建設された。こうした手腕は伝道面でも遺憾なく発揮され、彼の提案は年会を動かし、天下茶屋、阿倍野、築港、東淀川、神戸の教会が生まれた。さらに西阪保治と共に幼児教育にも熱意を燃やし、1926年の年会では幼稚園事業が開始される。

1927（大正2）年4月、自由メソジスト総会に日本代議員として渡米した土山は、プリンストン大学にコロサイ書の研究の論文を提出、修士の学位を

¹² 「入信の顛末 われらの総理土山鐵次師に聴く」『世の光』1941（昭和16）年9月1日、第180号。土山の入信の顛末は、この記事による。金田数男『世紀の伝道者土山博士の面影』1956年、愛信出版社によると、メキシコ人と喧嘩になりピストルを発砲した。大事に至らなかったものの、このことで悩んでいるときに永松氏に信仰を勧められた。

取得し、エルサレムを經由して 1929 年 2 月に帰国した。土山を待っていたのは東京聖書学院に始まり、当時の純福音派諸派内に広がったリバイバルである。土山はその立役者の一人となり、「主の来たり給う日を速かならしめるため、聖徒の数をみたせ」と叫んだ。

1930 年 10 月、全国リバイバル大会が、日本伝道隊の御牧碩太郎、ホーリネスの中田重治、日本自由メソヂストの土山の呼びかけにより東京聖書学院において開催された。米田勇はその日の様子を次のように伝えている。

「土山校長が祈られる。一句一句の合間にアーメンの声が会衆より叫ばれる。手を拍って祈祷が共鳴せられる。それがだんだん強くなって土山兄弟のあの大きな声が講壇にいても聞こえない。続いて彼方からも此方からも力を込めた祈祷が出る。未だ終わらぬ中に祈り出す。二、三人いっしょに祈り出して暫くして気づいて一人がやめる。立って祈る。手を挙げて祈る。拳を固めた両手をもって空を撃って祈る。遂に司会者の言なきに全会衆一緒に祈り出してしまった。何様祈りたくて祈りたくて仕方のない人ばかりゆえ、祈祷の声が大河の決する勢いにてまことにすさまじい」¹³

こうした純福音と自覚する教派の盛んな状況は中国においても見られ、前島潔は 1937 年の各教派の統計表を掲げた後で、後発ながら伝道が盛大で優勢なグループとして自由メソヂストやナザレンを挙げている¹⁴。

土山はバサディナのナザレン大学から博士号を贈られ、馬場嘉市や西阪保治等と袂をわかった後の日本自由メソヂストを保守的信仰により立て直す働きに邁進する。そして、リバイバルはホーリネス分裂の 1934 年まで続いた。

1935 年、土山が 3 度目の渡米から帰るころには、中国における戦火が拡大しており、次章で扱う彼の中国伝道が開始されることになる。1940（昭和 15）年 11 月 17 日、日本自由メソヂスト教会は、日本ナザレン教会、日本同盟基督協会、世界宣教団と合同し、日本聖化教団が成立した。日本自由メソヂストの総理であった土山は、日本聖化教団総理および教務院総長となっ

た。1944 年 4 月、天津教会の講壇において脳溢血で倒れ、日本に戻った。1945 年 6 月 15 日の空襲で、彼が心血を注いだ神学校は塵芥に帰し、敗戦翌年の 1946 年 3 月 14 日召天した（60 歳）¹⁵。

IV. 『怨みを毀つ涙の握手』

日中戦争下の 1938（昭和 13）年、土山は事变下の使命感を次のように語っている。

「事変は愈々進展するのであつた、涙なくしては読むことの出来ぬ皇軍犠牲の数々が報道される、此の犠牲を無駄にしてはならぬ。銃後にある私達も最善の方法を尽して進撃せねばならぬ。黒鉄の武器は手に持たない私達ではあっても、私達のみ持つ武器を持って、第一線に進み行きたい、そして支那人の基督教会を訪れ、又第三国人たる宣教師に親しく会って我が帝国の使命の真意を語って了解を与へ、真の日支親善を計り度い、之は私達基督信者を除いては、他の何者も到底なし得ぬ大きな貢献であると共に第三国に対する善き証であると思ふに至った」¹⁶

慰問伝道を決意した土山を派遣するにあたり日本自由メソヂスト教会の全教役者 30 人は有馬の山にこもり四日間の特別祈祷会を行なう。「三日三夜、祈り抜いた一同の上に、聖霊の大傾注があり、一人として恵にもるゝ者も無く、霊的大革命は私達の上に始まったのである。ここにリバイバルの大爆発となり、火は焰々と全フリーメソヂストに延焼した。この事件は、私の支那旅行記を記す前に必ず特記しなくてはならぬ事である」¹⁷。

10 月 30 日大阪を出発した土山は 11 月 1 日釜山に上陸、プリンストンの

¹⁵ 家庭的には鴿子夫人との間に、長男牧羔、長女緑につづき、二男牧羊、三男牧群、二女みぎわ、四男牧民、五男牧人を授かった。その鴿子夫人を 1932（昭和 7）年に亡くし、1936 年に鳥井欽子と再婚した。以上、金田数男前掲書による。

¹⁶ 土山鐵次『怨みを毀つ涙の握手～事变下大陸慰問伝道記、改訂・増補戦下に於ける宣教開始篇』1940 年（第 5 版）、日本自由メソヂスト教会出版部、2～3 頁

¹⁷ 土山前掲書、6 頁

¹³ ホーリネス・バンド昭和キリスト教弾圧史刊行会編『ホーリネス・バンドの軌跡 リバイバルとキリスト教弾圧』1983 年、新教出版社、32～33 頁

¹⁴ 前島潔「支那の基督教」『時の論叢書第二輯』1939 年、教文館、131 頁